

本書を手にしたみなさんへ(大学での学び)

「大学生になろう」

この言葉は、皆さんからすれば、今さら何をと思われるでしょう。確かに皆さんは、立命館大学に入学されました。ただそれは、「大学生になる」という言葉の形式的な意味でしかありません。それでは実質的な意味はどういうものなのでしょうか。



法学部 教授 徳川 信治

■ 学びの転換をはかる

大学は、「学問を修める」ところですが、それは大学ではこれまでの学びが通用しないことを意味します。

1つは、大学生活ですべて自分で決めなければならないということです。高校までとは異なり、大学では、ある程度の学習モデルが示されますが、そのどれを選択するかは、最終的に自分で決めなければなりません。

さらに学び方も異なります。大学では、講義形式のみならず、ゼミナール形式による学習があり、これが大学の学びの核として位置づけられています。講義も、教員が一方向的に話すだけの形式ではなく、双方向型、つまり「ハーバード白熱教室」のように対話をしながら、自分なりの見解を出すことを求める講義もあります。大学ではいかなる授業でも、自らがすすんで調べて発表する、という学習スタイルが求められているのです。

こうしたスタイルを確立することが「大学生になる」です。そのための準備として、まず、立命館大学はどういう大学かを知ってください。これからの大学生活がどのような環境なのかを知ることは学問を修める上で大切なことです。本書では、まず立命館大学の歴史と教育の考え方が語られています。

次に、大学での学びの目標を見つけることです。何を学びたいのか(専門分野など)、あるいは卒業までにどのような能力を身につけたいか、どのような人間になりたいか、といったことを思い描いて、自分なりの目標を立てることが大切です。

以上のことを行えるよう、1回生時の専門教育が初年次教育として提供されています。そこで大学での学び方をしっかりと身につけ、目標実現のために能動的で積極的な生活を送ってください。

■ 人文・社会科学系の学問を修める

ここで人文・社会科学系の学部にも所属するみなさんに、本書の中でも紹介されていますが、簡単にその専門の特徴を紹介しておきます。

まず、人文・社会科学の学問は「ことば」の学問です。自然科学の学問は、基本的に方程式の形で現されますが、人文・社会科学は、「ことば」を伝達手段とする文化や社会を研究の対象とします。そしてその成果も「ことば」を主たる手段としています。

次に、自然科学が、一般に自然現象の法則を見出す学問とされるのに対して、人文・社会科学は、文章や物事を読んだ者がそれを自分なりの説明をするという「解釈」をしなければなりません。

以上のように学問の対象が、人間・社会であり、「ことば」を大切にす学問ですから、これと大いに関わること、つまり大学の友人やその地域の人々と交流を深めること、学びを友人や先輩後輩などと共同で行うこと(コモンズで学ぶこと)が非常に大切です。大いに友人をつくって社会との交流を深める経験をし、そこから新たな学びの発見をしてください。

■ 未来を拓く人になるー未来を描く

最後に、入学されたみなさんは、その多くの方が未成年です。そして大学生活の中で成人となり、社会に羽ばたいていきます。「大学生になる」ことは、大人になる過程の1つでもあるのです。

立命館大学は、建学の精神を「自由と精神」とし、教学理念を憲法と教育基本法に基づいて「平和と民主主義」としました。こうした立命館大学の理念を本書の中で考えてみてください。その上で、自らの未来を描き、将来どのように社会と関わっていきたいかを考えてみてください。そのことが、みなさんの大学生活を豊かにしていくはずですよ。